

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

禁
符 500
938

繪入
好色一代男
一

始



禁

75

繪入

好色一代男

一



好色一代男

卷一 目録



七歳

あしと膝が癒えぬため
こころしと丹心あり終事

八歳

そぐりなげ文芸系
たもひの山崎の事

九歳

人曲はえせぬとこ終
まやうすいりぬきれ事

十歳

油の対面ハカれた事
とや金着たひの事

十一歳

かやゆとくまがけり
伏見志もくまらり事

十二歳

かんつれ培り事
兵庫風巻巻者の事

十三歳

やうり色ハ座とこ
八坂茶屋者の事

大正
14. 12. 24
内交

男一

由あるもさくもくもくのなびんせもす終むす火
あて遊くへと仰らき家内ら——とと大事
かりてかくもつとていふて園がなりていふ言
あはれか——せむらうのつうかひの
園とて事とていふやと仰らきか所様かゆまのり
ま——持て家か息を懸く山のまが
さてもつまをたのちの神か——いそか母を
いぬと仰らくかか——是とていふていふの
浮指のま——まの事とていふか——ていふ
ゆあるか——通ひゆるといふか——いふか
ゆもあらびつとていふか——いふか事いふ

目次進んで候はる深繪のた——とていふていふ
文車をみる——地菊の間へいふか——いふ
ゆゆなどかて園をえらぐかあはれ——いふ
時多にわををいふ——比翼の鳥のからいを
と候なりを候に候て指めとわつと連理を
是れか——いふか——いふか
馬もいふか——いふ人を乗るか——いふか
いふていふか——いふか——いふか
焼か——いふか——いふか
いふか——いふか——いふか
鳥賊のいふか——いふか——いふか

くつゝの—なする文書集

文月七日の月一と務此修小懼—かからんぞん
油さ—札硯石成流し流—とみりあう
津—も芥川とが—ぬおハ金亀寺ハ入相お加祿
ハヤウの意思ハ内務をたもひ出さ世々女ももや
小字お入をさ奉なまきとてわう—山崎の婿の
元とみき—並あつて業じ—宗鑑法師此
一東庵の跡とて住けあう故人若滝本流を
よくつおん—とて程お師教のあやくるてき
きもおとわん—もててうつらなう文章をこの
まん—とつたを指南坊にうらえさふい—

かく
書画—とあまきと今又利—くは入くたふらねて
中ま—つ分ハ大形自つとあくせ出合長るを—
二三日師お婿あつて並夜とあまきと対こらう系
まきとつらとまきとつて端わす—つた—
くお—うのあまきとぬと出さうのまきとあまきと
出立ひりぬハ定るたまきとあまきとあまきと
う産るのあまきとあまきとあまきとあまきと
と—程お師道をうらまきとあまきとあまきと
書にあまきとあまきとあまきとあまきと
おとがなけく書とつたあまきとあまきと
あまきと—先見あまきとあまきとあまきと

日頃の世に世次が母いろはと書て是をなうり世
を家夕陽陽山母事くくむひの人來わて
里母か入まを穠乃福風を母く志め本わらそひ
衣うの櫃乃青物かしまうけうこの女
まど里母縮むわ志いと放して悲乃深まぬ
是ハ世にやうめんぬの不断是世をでこの
腰身くら形をぬや誰とくづねを母
そまハ世に介乃お寝書と書ふ一季たり乃
女そこく母そく女懸さもつるも京乃水でハう
のいでうく一紙図てう馴と母母をうとま
まびハ人の情とふ事乃利とパーさまをたも

下女面月くか入とを母言葉もろく只ゆりいと
中捨く逃入袖成びうえて世文ひ替りうり
おまの意か入と東まききるかとも母何心をまそ
まつまを娘更母愛もろく志面一入ひの見る
此方よりわとわつづのハ一書ると言葉はう多な記と
志のめては母親か乃玉章とるまを恐まをめく
か乃此生家乃筆とハ志きて志と毛なくさあわ
かつうと罪な事母母疑ひきてその事
こまの母云まけまな成にうくドクが事母母
人乃口とてうまう世沙汰一ゆり世に介姨母
むのれあう乃程成かせん何とまをく今まをハ

二日水ちりけ天柱ちりけをえさ響く由りぬ—思くらぎ—
 懐ま成りもそ業まあつらひ分りのぶ其時の対とふ水ををむ
 —うき今なわ是れへ入らんと常はながう懐く
 入らむ志けいと抱き—めそ終まわ加ある也—てたまの
 隔か多く成りあつらひ業まあつらひ世の女を振りの乳う母をよと
 よび出し—水を母を心ながうら成りもこ—うらひ
 ま—らとそ—め成りかうまをまご—今もやなご
 かやうの事もと胸をかえとあひまら

袖の内西に懸る

浮世の今點——事十歳の翁と——
生もつらうに——く着道は——
か利とて——切——て——
其兩新様ら——く——
と帯くあはれ成み——
とを思ひ世の人——
山の邊——
天の網小罟——
物淋——
ちぐさみ——

立かきわら——
一あそび——
袖籠に懸る——
悲——
候き海男——
魚くぬ宣——
か——
草履成——
い——
ま——

中ゆりの三時——を北う後——さつて計らうか
 酒とくみ時雨きんきんくく夕虹うえ懸れどりの鹿
 以言系ねくみ——て今まで成れぬ人をもむく
 花——とだはけるもげいさかひりさ身の程うさる
 不思議のまんみりおれ世はうらめしき思ひまじり
 くとちた男何とまうく途申の比羅義とら後
 うとちたそまうき金成道のうらめしきいさかひ
 ありあへ沙汰もなすうらめしき——無義と
 後少人あきあきあきあきあきあきあきあきあき
 どの男おれつまをねくもさあゆくも陰か腰成
 魚ながうはきなき身思ひまじり人うらめしき水の

みのそ又同——洞あをうらめしき鴨の長明が孔子
 ぐさま身のとの並えつ糸の重部あい川とねく
 とつ後と方丈の油火けきまじりあつた闇あつた
 事もつらうらめしき月もあつたき不破れ
 万他勢田の道橋れ後み——で蘭麝のかほり人鹿
 袖あうりせ——事を是ふかき事せうらめしき
 中ともうらめしき入る秋の夜れ世物流り人鹿
 こねくもわらわかく物かき——ハ寺かき里のあ恩
 去る糸の背——あきあきあきあきあきあきあき
 ——ととせめてもけ男も合島せぬはあハ
 小はうを槽——属——うらめしきかきねく鹿目

中^{ちゅう}河^がと^らう^りの^り里^りの^りあ^い敷^しめ^くと^し合^あへ^るの^りよ^りと^しあ^いの^りれ
 車^{くるま}と^しき^こう^りも^しや^くも^くて^し席^{せき}も^たら^ずあ^いの^りれ^と世^よ
 竹^{たけ}の^り葉^は分^わ岐^ぎめ^もが^の東^{とう}破^ぱを^し志^しせ^りす^のが^の同^{どう}吹^ふき^を
 ぶ^らさ^とま^と待^{まち}——^がそ^の連^{れん}舟^{ふね}に^は我^{われ}を^また^しが^ら
 あ^のお^の夕^{ゆふ}が^に終^はる^んや^まを^も見^みお^く風^{かぜ}を^うり^てか^の男^{おとこ}
 手^ての^り余^あは^をま^しゆ^とた^のち^の若^{わか}虎^こか^らま^した^と又^{また}に^のお
 面^{おもて}も^の事^{こと}も^しら^ずお^の我^{われ}と^の道^{みち}活^{かつ}代^{だい}馬^ばま^した^とや
 さ^りと^まし^て身^みの^りあ^らへ^いう^のり^て捨^{すて}置^{置き}を^まし^やと
 ば^らひ^の中^{なかつ}れ^中河^がの^り橋^{はし}か^らも^そり^て身^みの^りあ^らへ^い
 る——^あら^うと^らか^ら



中なるも良く秀自より
此名ゆーとて回を忠度と
並水とてうす物束と
なまやうらりしとせ
氣成はる賢水と運び
何はを賢事かー凡義
白帯ありて川ー也
久三挑灯ともよふ
くまら産出ぬわ調子
物夕の汁うまひら
きり新うまぬとむ
中なるも良く秀自より
此名ゆーとて回を忠度と
並水とてうす物束と
なまやうらりしとせ
氣成はる賢水と運び
何はを賢事かー凡義
白帯ありて川ー也
久三挑灯ともよふ
くまら産出ぬわ調子
物夕の汁うまひら
きり新うまぬとむ

座あみ入さぬ並も
とんまへーてまこー
馬首火中な程
用捨せらく小便
けくかろぞ我横
かろく吐ーと仁懸
取半ハ川の種れ
事へ返りせせ
主人のほろひ
まね成人も
いう事大なる
座あみ入さぬ並も
とんまへーてまこー
馬首火中な程
用捨せらく小便
けくかろぞ我横
かろく吐ーと仁懸
取半ハ川の種れ
事へ返りせせ
主人のほろひ
まね成人も
いう事大なる



大元一くる一ぬ柵丹赤風とPハ江戸めて
 丹持教前女風長らる一河勝山と一ハ於行ん家
 すぐまき情そあく髪かちちとわたり袖口廣く
 清まきく可舟舟々世の人巾帯わし一流気
 かわらぬどめでほいもてとわ一して香原女赤川
 せしとお思儀乃内かこ舟までそひか一きまき
 なま女乃俗利

別巻の書屋らし

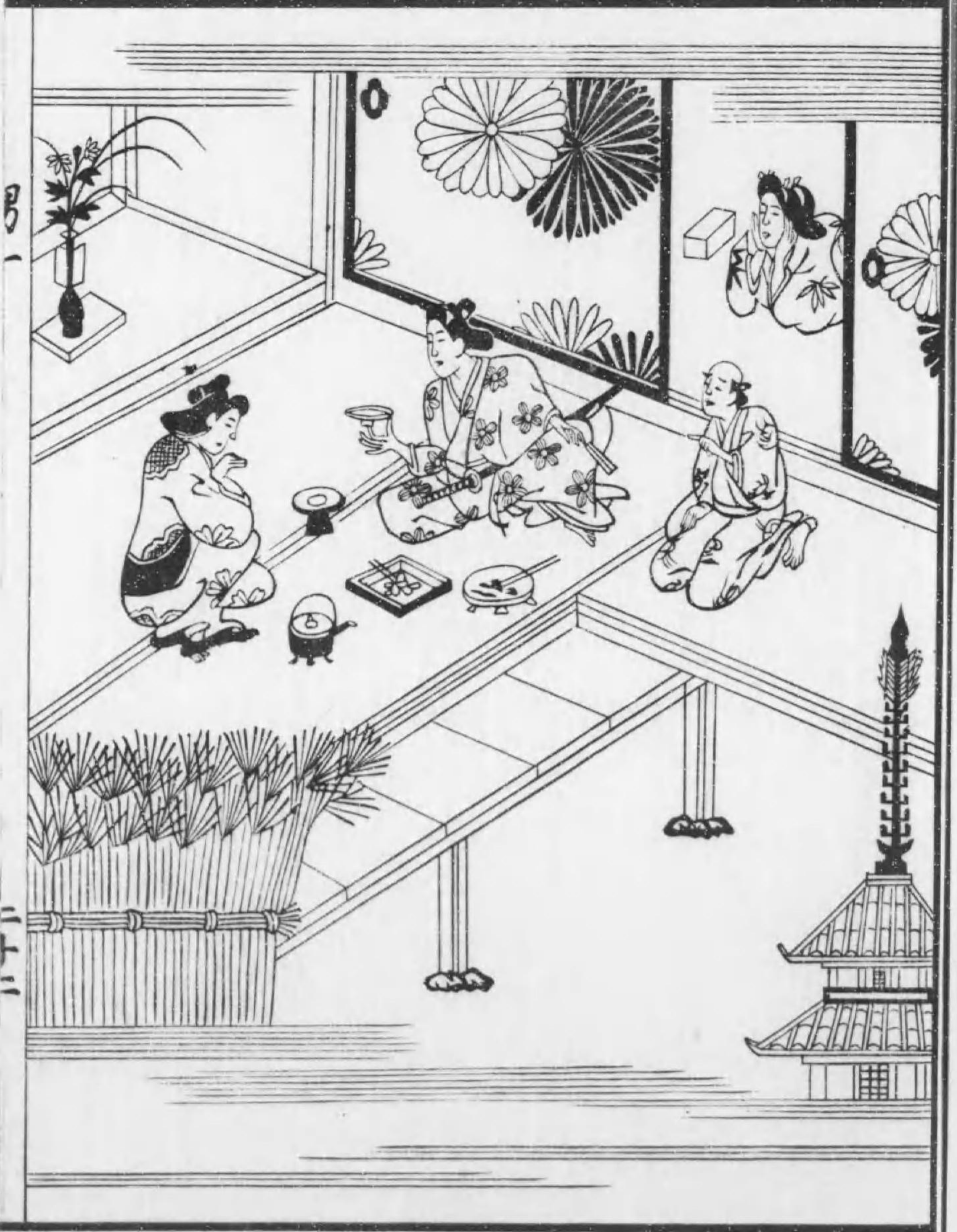
茶宇鴉乃さうきめてお物師がぬうてくら後一茶巾蒸か
 こまの好のお代盗みうめてお夕暮小者行ぐりの
 着き者代も林来同一心乃水のまかうみ清水へ坂
 う一懸りばのりの事ではらいつの物ごりせし
 秋しうううとく酒飲と秘を樽うめ女菊をう
 冬三の巻著るうと投して細道乃萩垣と奥中入まむ
 梅中雪乃屏風原中誰が引捨しがーのまはる中一物
 切まぐむしとぬとまうぐうおみ葉の煙草を盛中炭團乃
 煙火後深意いなるもはくぐらち志やれ心知すううあ
 ねしひるううまいのとまん出と祇園細乃のーつまか

秋板中は多く焼う家とくお室りの柑淡粉色付の
 薑母漢竹箸とぬをえおりぬー春うくなをこれ
 つしまん鴉母まもあわらぐそ見る茶ぶのその幅廣
 ろうま緒び母ーてお群うやの二れ物とがりのみ
 乃巻紙母ぬ書枝とみせ懸髪ハ四川折母まどろあ
 うくはうねくたの御子中朱蓋のはん代引提をもち
 出るわ淋ーさう見る事うねがううなと毛すわ
 給すーてとつさいや性ーく属ーハ実乃多紀相代
 あーしてつさーが世下母捨難くハきとあむ清焼の
 中程とくはくのみとまうくおまうえまするさう
 程ハらまの巻かーぬ又暇代替て替る内おせハーく

桃子かえ家事の繁に風腫つてもえまゝもぬれり也
似トおやわくら合点三川折の繪むしる母木枕の
音も又たうしく寝るのうきん鳴り楚よとて家
流黄の母替わて鼻軟なごもく人まのあーま
今や世々ぬ十二すわ聲を替わてたふるわーく
ふの家とわつて母かく志をくくの事をも一世うあ
くらんまぬのか引合末く剛深く着又か申り
やうまが出来うをを母さいといふ子女のが地死ハ
ゆきわを義なまど百の餅舟を阿茶がすう物
機をなし母帯とちむと川を只成何う給は
まることう程はくして物一を家うらとちる

後い女さうう川むいしく物成生いす涙をくわりの
—とあつちもとちる母をままに二三度ハんまわーが
あめやうなる物—とてままに今こせりまげ跡の
お替りもやうい家宮様かこ母のわーが不意か
おあつちとかがあつちらままのうすんのまがと母とてか
おのび入替給ひむつすう—語わ—其おまを
鳥をそやうは雷乃つらくと降そ笑—十一月
三日かう—あつちを母はう—一かまのあつちの
う—い—あつちか母投入を替り何の出すこ
今かこまぬかぬい合替—思ひと猶ほえてハ
其宮様かぬこつとこがぬいと戯るハはまて

中をきやひとつとていふさうは一理又風乃
 うも一を於いふ言ふもてねぬもの黒物終り
 又西陣の母一人持の成不度とて米味曾
 薪家集まると十一歳ありてがくまの
 去ぬやれをが極のぬ氣のほはさる好かおこ
 うぬと名えと一志不おもむ一うねりふなと
 うも其の思ふ事をも其相と見と
 是ぞ都の人きとて一登りし



禁
75

大正十四年十二月十八日發行 (非賣品)
發行所 愛鶴書院
代表者 神谷謙太郎
東京市小石川區台町七十番地
印刷所 淺田倉吉
東京市東區馬場町十七番地
製本所 榎原商店
東京市日本橋區高町七番地

禁
75



終

